

●シンポジウム

環日本海地域における人と動物

一九八九年六月三日、山形県南陽市で行なわれた日本口承文芸学会大会でのシンポジウム「日本海文化における口承文芸」のパネリスト報告と討論を掲載いたします。報告はシンポジウム終了後、各パネリストにまとめていただきました。討論は大会時のものです。シンポジウム司会は大林太良氏です。尚、題名は内容に基づき、編集部で変更いたしました。

「鮭の大助」のこと

大友義助

はじめに

山形県庄内地方はその近海においても、河川においても鮭のよく

獲れる所として知られている。この鮭の漁について、その漁期の特
定の日、鮭の漁を忌む風習がある。日には旧暦十一月十五日と
いい、あるいは十二月二十日のエビス講の日ともいうが、この日は
鮭の大助・小助が眷族を率いて通るので、これを誤って獲るような

ことがあつては大変だと言うのである。

この日、鮭の大助が通るといふ伝承は庄内地方だけでなく、内陸地方の最上川・鮭川・小国川・円生川・寒河江川などに沿う村々にも分布する。最上郡の鮭川流域や最上川流域では、鮭の大助はこのとき「鮭の大助 今登る。鮭の大助 今登る。」と叫びながら登るが、これを聞いた人は三日と生きられないといひ、築衆はこの日築を休み、仲間で盛大な川祝いを行ったものであるという。

最上地方の昔話にもこの伝承はさまざま形で語られている。

また、山形県の各所に鮭を神饌として供える神社がある。同様に鮭が自ら川を登ってきて、本尊の儀になるとの伝承をもつ寺もある。この鮭は、あるいは「注連かけ」の鮭といひ、あるいは「数珠かけの鮭」とよばれるが、決して人間は獲つてならないという。この戒めを破る者は立ちどころに死んでしまうなどとも伝えてある。

これらの伝承ないし禁忌はどのようなことを背景として成立しているのだろうか。伝承の周辺のこととも考慮に入れて、このことを考えてみたい。

一、鮭の神饌

鮭を神饌として供える神々のうち、とくに注目されるのは次の諸例である。

(1) 真室川町大字大沢字小国の大日様

この神は村の一民家に祀られている神で、御神体は、昔、源義経が授けたという古い小さな掛軸である。旧暦十月十五日が祭日であ

るが、この日正午、当家の主人がこの掛軸をほんの数分間、するすると展げる。参詣者はこの画面を拝して、家族の健康や家運の将来を占う。

これには鍋からあげたばかりの鮭の切身が供えられる。参詣者はその湯気の中で掛軸を拝するので、見る人によつて、中の絵が幽霊にみえたり、棺に見えたりするという。

大日尊に供える鮭は、他の鮭と違って、背中に十字のたすきをかけている鮭であるが、この鮭は決して獲つてならないとて、大沢川沿いの村々では祭りの七日も前から川端に行かないようにしている。大日尊に鮭を供える風は藩政時代から行われていたようで、宝暦年間に編さんされた「新庄領村鑑」にも鮭の供物のことが記されている。

(2) 尾花沢市正殿の御所神社

御所神社は順徳上皇を祀つたと伝える厳しい神社であるが、その縁起に「社ノ背面ヲ流ルル赤井川ニ注連掛鮭ト称スル魚毎秋季ニ上ル来リアリ、土人之ヲ御所神ノ生贄ナリトヲ捕フル者無シ」と記してある。

(3) 山形市宮町の両所宮

両所宮は月山と鳥海山の二神を祀る古社であるが、同社の年中祭式によれば、旧暦九月二九日の祭りに鮭を献じたとある。

(4) 西村山郡河北町溝延の阿弥陀寺

この寺が開かれた頃、門前の小川に朝夕二度ずつ鮭が上つてきて本堂に至り、本尊の阿弥陀仏を拝んでいたといふことである。この鮭は首に数珠を巻いているので阿弥陀魚と呼び、獲ることを戒めて

いた。ある男がこの禁を犯して鮭を獲って食べたところ、たちどころに病に襲われ、亡くなったということである。

(5) 天童市津山の東漸寺

東漸寺は一向上人が開いた寺であるが、上人の慈悲は鳥・けもの・魚まで及び、多くの鳥獸がこの寺に参詣に訪れた。鮭は首に数珠をかけて小川を登り、高い石段を上って本堂に至った。現に数珠をかけた鮭が苦しみながら石段を上って行くのを見た人もあった。この鮭は誰も獲らないことにしているが、秘かにこの禁を犯した男があったが、このため彼の一族は次々と変死し絶え果てたという。

(6) 東村山郡中山町岩谷観音

岩谷十八夜観音はこの地方の巫女が籠る山とされている観音であるが、秋の例祭には決まって生きたままの鮭を供えるものであったといい、鮭を入れる箱が伝えられている。

二、鮭の大助の伝承

新庄市蛇塚の佐藤ミナエさんの語る昔話に次のような話がある。

むかし、山のけものや川魚を獲って暮している男が子牛を連れて歩いていたところ、鷲に襲われ、子牛がさらわれてしまった。男は仇を討つべく山中に入ったが道に迷い、ようやくにして灯を見つけ助けを求めた。

この家の女が男をみて、「私は以前あなたに飼われていた猫である。いまは、これも同じくあなたの家に飼われていた犬と一緒になっている。主人はマタギをして暮しているが、あなたのことをひどく恨らんでいる。」という。やがて、マタギが帰ってきて男を見つけて、「お前の仕打ちで大けがをした。こんな奴は殺してしまおう。」と怒って鉄砲を向けた。しかし、妻のとりになして、この場はどうにか無事に収まった。

男は何とかして村に帰りたいと夫婦に懇願すると、マタギは一人ではとてもこの山から出ることはできない。師走の七日に鮭の大助が川を下るからそれに乗って行けという。この日、男は川端で待っていると、「鮭の大助今下る、鮭の大助今下る。」の大声が聞こえ、山のように大きな大助が姿を現わした。大助は男を目にすると烈火の如く怒り、「俺の眷族を根絶しようとする奴は一呑みにしてしまおう。」と襲いかかってきた。男は今は川魚を獲らないからと謝って乗せて貰った。

いくつかの山と谷を過ぎて里に出た。村々では、師走の七日の晩ということ、みな行屋に集まって鉦や太鼓をたたき、「さんげさんげ 六根罪償」お注連は八大ごうぐの一の如來」と唱えていた。大助の声を聞くと来年は不作になるといので、村中行屋に集まって大騒ぎをしているのである。頃合いをみて、男は鮭から降りて貰い、久しぶりにわが家に帰った、というのである。

鮭の大助（小助ともいう）の声を聞くこと凶事が起きるのでこの日は漁を休み、宿に集まって酒を飲み、鉦・太鼓で歌を歌うという伝えは、東北地方全域で広く聞くことができる。舟下りで名高い山形県戸沢村古口辺の最上川では、村人が網を張って鮭を獲っていたが（これを「ヨイ待ち」という。当地方は鮭のことをヨイ、または鮭のヨイという）、旧十月二十日の夜は鮭の大助が登るからとて網を

はずし、「ヨー待ち」を休んで、早く寝ることになっていた。

最上川の支流寒河江川流域の西川町水沢・大井沢あたりにも同様の伝えがある。水沢では鮭の大助は山中に住む怪物で、秋に川を下るといい、大井沢では、昔、鮭の大助が米沢の軍勢を先導して攻め込んできたと言つて、大助の声を恐れ、この日は早く寝るといふ。

三、鮭の千本塔婆

山形県遊佐町吹浦の近海は鮭の漁場として聞えている。吹浦海岸の小高い丘には三十本ほどの角塔婆が海に向つて立っている。この塔婆は「鮭の千本塔婆」と言つて、鮭を千本獲ると、その一匹を近くの海禪寺に持つて行き、供養して貰うのだそうだ。塔婆には船の名前と鮭の菩提を弔い、その成仏を祈る趣旨の回向文が墨書されている。十月の漁期が終ると、海禪寺の住職を招き、これを立てるといふことである。

海の鮭はやがていっせいに日光川や月光川を溯上する。これらの川では大きな築を設けていて、一匹残らず獲つてしまう。一日何百匹とない鮭を捕らえては、その頭を棒を叩いて殺してしまふ。ここにも、鮭の千本供養塔が立っている。

結 び

こうしてみると、多くの魚の中でも鮭は何かしら人間から特別視されているように思われてならない。山形県最上地方では鮭のこと

を「ヨー」と呼ぶことは前に述べたが、この発音をよく聞くと「イオ」に聞える。「イオ」は魚のことであることは言うまでもない。つまり、鮭は魚、とくに川魚を代表する名のように思われてならない。そうとすれば、鮭の大助は正に川魚の主であつたに違いない。

付記

以上が大会での発表であるが、現在の私の考えでは、鮭が縄文人にとつて重要な意味をもつていたとすれば、それは何らかの形で後の時代に影を落しているように思われる。「鮭の大助」がこの謎を解く一つの鍵になり得るのではなからうかと愚考しているところである。

(おおとも・ぎすけ／山形県新庄市史編纂室)